



1月3日 厳かに行われた平成20年成人式  
男性54名、女性39名が対象

式典では清水村長が「いつの時代も努力は報われる。前向きに自分の道で誠心誠意努めれば、それが両親、保護者への恩返しとなり、この世を明るく住み良い社会へ変える原動力となります」と期待をかけました。新成人を代表して阿部美都樹さんが「子どものような好奇心を忘れず何事にも積極的にチャレンジしていきたい」と、三澤千明さんが「素晴らしい友人を育むことができる原村の温かい環境を、大人として次世代へ伝えていきたい、その責任を担っている」と発表しました。また、村からの記念品が代表の小島拓也さんと夜久あかりさんに贈られました。実行委員会が企画、進行したパーティーは盛況でした。久しぶりに会う友人や式に出席していた中学時代の恩師らとの会話も弾み、小学校の音楽会のビデオ映像がスクリーンに映し出されると、歓声を上げて当時を懐かしんでいるようでした。



COLUMN

村長まよしの  
山麓朴談



信濃毎日新聞一月三日の社説に、原村のことが取り上げられました。「成熟の社会へ」とする6回シリーズの一つとしてです。何にしてもマイナスではなく、特徴のある村としてプラスのイメージで、取り上げられるのは嬉しいことです。

その内容は次のようなものでした。「平成の大合併」の大波が去り、新たな自治への取り組みが全国の自治体に求められている。足元の自治を確かなものにしておかなければ、この先道州制などが出来た時、対応はおぼつかない。地域づくりのポイントは、独自の政策で安心を保障することだ、としています。原村の65歳以上の高齢者の就業率が54・5%と県下市町村中随一であることを評価して、65歳以上の医療費や各種健診の無料化など、独自の健康づくりが寄与していることを認めています。原村の目指す地域づくり、そ

れはいかに特徴ある村を実現し、住民の幸せを確保するかにあります。自治体は大きさではなく、独自性をもって住民主導の自治を行っていくかです。原村の行政も住民と共にその幸せ実現のために努力をしていかななくてはなりません。

しかし幸せとは何でしょうか。一般的には物やお金が出ることだと思われがちです。それだけでしょうか。生き甲斐や安心、誇り、人間関係など心の問題は、どうでしょうか。

インドとチベットにはさまれてブータンというヒマラヤの小さな国があります。とても貧しい国です。国民1人当りの年間所得は約9万円、日本の約50分の1しかありません。それでも国民の97%は「幸せ」とも「幸せ」と答えているのです。チベット仏教という心のよりどころをもって、自分たちの伝統と文化を大切に、自然と人、人と人との繋がりを大事にし助け合って簡素で穏やかな暮らしをしていく事に、この国の人たちは誇りをもっているのです。「国民総幸福度」が重要と考えて国づくりに励んでいます。

原村もユニークな村づくりで「村民総幸福度」を誇れるような地域を、公民協働で作って行きたいものです。原村長 清水 澄